



「一人称で捉える安全」へのチャレンジ

～重大事故を契機として～



シーキューブ株式会社

1. はじめに

平成27年1月8日深夜に、私たちにとっては忘れることのできない「一酸化炭素中毒による死亡事故」が発生しました。

その事故は、深夜の閑静な住宅街で発生しました。近隣のお客様の睡眠を妨げないようにと発電機を車内で使用したことが原因でした。それまでは、車内で使用していても大丈夫だった、ドアを開けていれば大丈夫だろう、との過信だったのかもしれませんが。

実は、重大事故の2カ月前にもある建物撤去工事で一酸化炭素中毒による緊急搬送事故が発生していました。同種の重大な事故事例をしっかりと認識していれば、防げた事例だったのかもしれませんが。

シーキューブグループでは、この重大事故を契機に安全への取組み方を変えました。安全施策や基本動作の「強化」や「徹底」という従来の取組みから「再構築」という言葉を使い、中身を変えることにしました。それは「原点に帰る」ことです。すなわち「作業員一人ひとりが安全を一人称で捉える」取組み内容です。その取組みを4年間継続し、大きな改善を図ることができました。

2. これまでの安全に対する主な取組み

昭和50年から5編におよぶ具体的な基本動作を記したマニュアル「安全作業心得」(図1)を作成し、展開しました。平成5年8月に「事故絶滅三原則」(図2)、平成21年3月には「労働安全衛生・品質方針」(図3)を制定し、現場とデスクが一緒になり多方面から安全施策を実施してきました。

毎月の各営業所での安全ミーティングには本社幹部が参加し、安全講話を行うとともに、社長自らが「釜石の奇跡に学ぶ」を引用し、基本動作の大切さを訴え続けました。また、シーキューブグループの安全推進計画において、次の主な施策を実施してきました。

【アクセス編】 【ユーザー編】 【土木編】 【ネットワーク編】 【モバイル編】



図1 安全作業心得

シーキューブグループの『事故絶滅三原則』

1. 決めた事、決められた事は必ず守る。
※「決められているからやる」(受身的)ではなく、「危険だからやる」(自律的)という考えで取組む
※「決めたこと決められたこと」の背景・理由を知って理解を深めておく
2. 節目、節目で5秒の確認をする。
※人の弱み(エラー)を補完する対策であることを認識しておく
※節目(一連の仕事の「重要ポイント」)を把握しておき、節目で何を確認するのかを決めておく
3. 絶対に無理をしない。
※自分・班員の技量(スキル・知識・体力)や健康状態、機械・工具の機能・性能を知っておく
※作業現場の環境を把握し、技量・機能・性能を超える場合は作業中止の判断をする

図2 事故絶滅三原則

労働安全衛生・品質方針

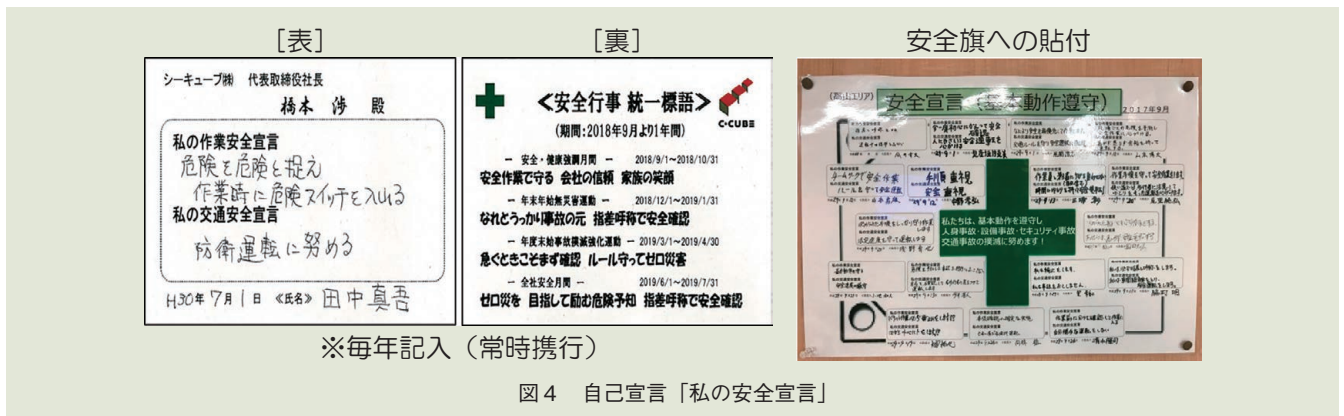
お客様からの信頼と満足を得るため、
すべての仕事で災害防止に努め、
最高の品質を提供する。

行動指針

- 1 法令及び社内規程で「決めた事、決められた事」は、必ず守る。
- 2 事業計画達成の手段としてマネジメントシステムを運用し、定期的・有効性を評価するとともに継続的改善を行う。
- 3 一人ひとりが「すべての仕事」に誇りと責任を持ち、技術力と創意工夫で安全と品質を確保する。
- 4 活動内容は、各種会議及びレビューを通して定期的に周知し、文書は、全社掲示板等にて閲覧可能な状態とする。

平成27年7月1日
シーキューブ株式会社 代表取締役社長 橋本 渉

図3 労働安全衛生・品質方針



①安全教育の充実

ヒヤリハットかわら版の発行、自作の事故防止DVDの作成等、安全教育材料を充実すると共に、作業班長に対する安全教育を強化しました。

②安全点検・指導の充実

夜間の安全パトロールやスポット班（新規入場者）への指導を充実すると共に、指摘の多い作業班への安全パトロールを強化しました。

③安全施策の再点検

PSF手法による事故発生原因の深堀りと現場リスクの再点検を実施。また、リスクアセスメントを作成し、経験値以外のリスクを取り除く取組み等を行いました。

このように数々の取組みを実施してきましたが、実際には、事故件数の大きな減少にはつながりませんでした。そんな中、一酸化炭素中毒による死亡事故が発生してしまいました。

3. 安全に対する取組み方法の発想転換

これまでの事故発生時の再発防止策は、「～を強化する」「～を徹底する」を繰り返し、チェック項目やチェックの仕方、安全パトロール回数を増やす等の対策であり、『分厚い鎧と重たい兜（Raisers 2010年11月号 Opening Message）』で提起したルールが積み上がるという状態でした。また、デスクで決めた「しなければならないこと」「してはいけないこと」を、作業者が基本動作として守っているかを監視することが主な取組みでした。

しかし、作業者を常時監視することは現実的ではありません。多くのことを正しくやれと言われてもできないのが人間です。作業者を守るために良かれと思って取り組んだことが、実は作業者にとっては、まさに「分厚い鎧と重たい兜」になっていました。

そのため、作業者自らが安全行動を行う自覚を持つために、「自分が決めたことを自分がやる、自分が決めたことだから必ず守る」ことに原点回帰し、「自分を守り、職場も守る」いわゆる「作業者一人ひとりが安全を一人称で捉える取組み」へと発想を転換しました。

4. 「一人称で捉える安全」の取組み

安全に対するこれまでの発想を転換し、原点回帰するためには、まず会社が本気になり、作業者をその気にさせる必要があります。平成27年度の事業計画の三本柱の1つに、初めて安全に対する方針として「安全・安心・信頼の再構築」を明記しました。平成28年度は「定着化」、平成29年度は「定着化の継続」、平成30年度は「定着・充実」として、4年間取り組んできました。

ここからは、シーキューブグループの各営業所において、作業者が安全を一人称で捉えるために実施している具体的な取組み事例について紹介します。

(1) 自己宣言【マインド形成】

安全を一人称で捉えるために、まず「自分がやること」を決めて、自分自身の年間指針として宣言することから始めます。また、安全ミーティング等においては、安全意識・知識・行動を高める訓練を行うことに加え、その都度、危険回避行動を宣言する仕組みを作りました。

①私の安全宣言【年間】

年度当初の事業計画において、安全推進計画を策定します。それに伴い、幹部を含めた全作業者が年間の「私の安全宣言（作業・交通）」を「安全行事統一標語」の表面に自らの手で記入します。それを常に携行することで、自分自身を守るために自分が決めた宣言であることを意識します。また、「私の安全宣言」を営業所全員が安全旗に貼付し、基本動作を順守する宣言もしています（図4）。

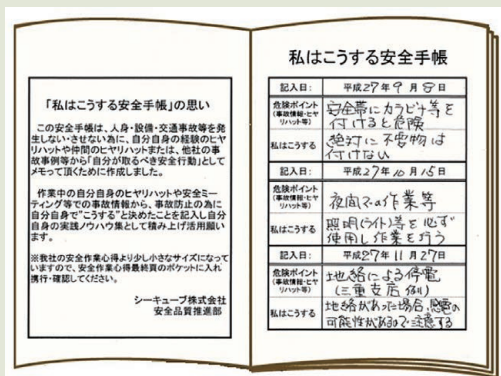


図5 自己宣言「私はこうする安全手帳」



図6 重大事故の風化防止「大型パネルによる毎朝確認」

安全アーカイブの視聴



私はこうする安全手帳への記入

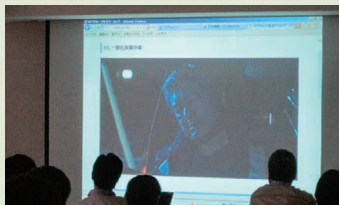


図7 重大事故の風化防止「安全アーカイブの視聴」

全員の前で発表



②私はこうする安全手帳 [都度]

安全宣言も、記入して終わるだけでは意味がありません。「私の安全宣言」を思い出し、具体的な行動につなげるために「私はこうする安全手帳」を活用します。自分自身が経験したヒヤリハットや仲間のヒヤリハット、事故事例から「自分がとるべき安全行動」としてメモし、事故防止のために自分自身が“こうする”と決めたことを記入します。それにより、危険を察知する感度をアップさせ、その時に自分はどのように危険を回避するか「自分自身の実践ノウハウ集」として積み上げていきます(図5)。

(2) 重大事故の風化防止

これまでに発生した「忘れてはならない重大事故事例」を中心に大型パネル化し、各営業所に掲示し風化防止に努めています。

①大型パネル化による毎朝確認 [毎朝]

事故発生時の注意喚起として、発生事象や注意事項を

周知するだけでは一人称とならず、案件によっては、重大事故再発の可能性も高まることから、過去の重大事故事例を中心に大型パネル化し営業所に掲示しました。また、毎日の朝礼時には、従来は聞く側の作業者が全員の前で、自らの言葉で事故概要と注意すべきポイントに加え、「何故？」を説明します。自分が説明することにより、重大事故を必ず思い出すことになり、自分の事として捉えられます(図6)。

②安全アーカイブの視聴 [毎月]

NTT西日本東海事業本部様と通建会社等が、1年に1回合同開催する「東海安全推進大会」では、重大事故を疑似体験しています。当社からも作業者を参加させますが、参加人数も限られることから、NTT西日本様提供の安全アーカイブや自作DVD等を視聴することで、疑似体験をする場を増やし、さらに一人称とするために、視聴後に「私はこうする手帳」に書き込む等の活用もしています(図7)。



図8 KY、指差し呼称の徹底

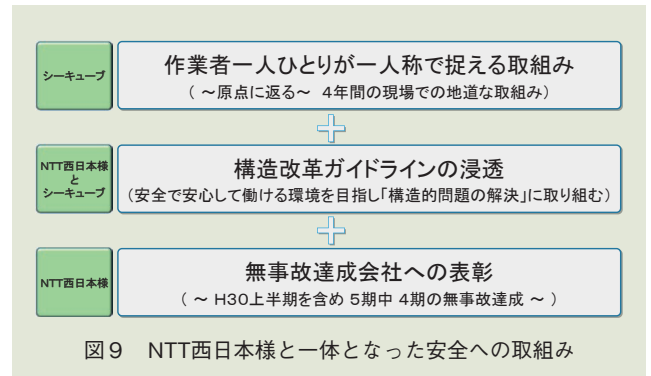


図9 NTT西日本様と一体となった安全への取組み

(3) KY、指差し呼称の徹底

【日常作業】

現場では危険作業が多くあります。また、ヒヤリハットも発生します。危険を回避するためには、日常作業の中でKYや指差し呼称を実施しますが、確実に励行されていないケースもあります。そのため、日常からの癖付け、習慣化をするために、安全ミーティングにおいて、各グループによるKYTのあと、全員で指差し呼称の実技訓練も取り入れています(図8)。

また、安全ミーティングの後には、安全品質担当や安全専任者、班長等による「安全衛生協議会」を開催します。その中では、各現場環境や危険工程に合致したKYとなっているか、指差し呼称は実施されているか等を「ボイスKY」をもとに班長が相互に確認しています。

5. おわりに

従来の安全への取組みの発想を変え、中身を変えて「再構築」という言葉を選び、事業計画に組み込み、「作業一人ひとりが安全を一人称で捉える取組み」を4年間地道に実施してきました。さらに、NTT西日本様と一緒に「構造改革ガイドライン」の浸透を図ってきたことで相乗効果が生まれ、事故発生件数が大きく改善しました(図9)。それによりNTT西日本様受託工事における半期表彰において、5期中4期の無事故表彰をいただくことができました。無事故表彰を継続目標とすることは、安全を推進する上で大きな励みになります(図10)。

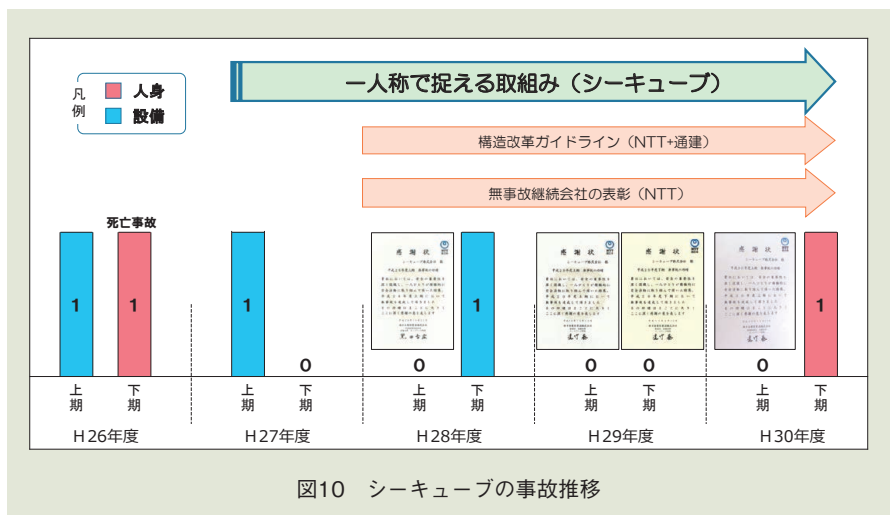


図10 シーキューブの事故推移

しかし、平成30年度下期に人身事故を発生させてしまいました。永きにわたり無事故を継続することは、本当に難しいことです。取組みがマンネリ化していないかをしっかりと再確認した上で、「作業一人ひとりが安全を一人称とする取組み」を継続していきます。また、安全を一人称と捉える取組みが実行しやすく、より確実なものとするために、ICTでサポートする仕組みも取り入れていきます。

他方、民需系においても事故が散見されますが、これまで以上に受託業務を拡大しており、さらに新たな分野にも挑戦しています。短期(スポット)での業務委託、専門業者に対する安全対策等を実施することは、非常に難しい面もありますが、シーキューブグループ総力を挙げて、「一人称で捉える安全」をベースに取り組んでいきます。

最後に、安全の取組みに終わりはありません。「すごい会社」のベースになる「安全への挑戦」を今後も地道に継続し、無事故を目指していきます。